縄文杉新聞

編集
石津由依

三瓶火山の噴火と埋没林

十一月十六日と十七日、私たちは大田市の石見銀山、三瓶山、温泉津町を訪れました。

私はさんべ縄文の森ミュージアムにある「三瓶小豆原埋没林」の事前学習を担当しました。訪問当日は小雨が降り気温も低くあいにくの天気でしたが、ミュージアムの中は寒くなく四千年前の空気を感じさせる雰囲気でした。

事前学習前では、埋没林について調べましたが、実際に巨大な杉の木を目の前にすると、その大きさと年月の重みに鳥肌が立ちました。思った以上に杉の木は高く、当時の高さは５０メートルはあったそうです。

埋没林ができた過程は、四千年前に三瓶山が火山活動をして噴火したことで土石流と火砕流が起きたことが一番の要因です。土石流が小豆原の森へ襲いかかった際、地形の効果で勢いが弱まり森の木々は根本が土砂に埋まるだけで済みました。そして、火砕流が発生しましたが、谷で水が溜まっていたため、樹木は幸運なことに表面が焦げるだけで済んだそうです。

また、火山灰が森の木々が湿気や空気と触れるのを防いだことも森が化石として残った大きな要因の一つだそうです。

埋没林を今の状態で残し伝えていくため木の表面に薬を塗り保護しているそうです。

年輪からわかるロマン

～ 樹齢だけではない ～

次に根株展示棟を訪れました。その地下で見たものは杉の木の根株でした。この根株を見て初めは木の切り株だと思いましたが、杉の根っ子だと説明されました。

よく見ると七か所以上もの年輪がありました。これからわかることは、倒れたこの木に他の木が倒れ、そこからまた芽が出て他の木が成長したことがわかるそうです。

また、年輪は四千年前までの気候や気候変動についてわかるてがかりになるそうです。縄文時代の気候が分かるとはロマンを感じます。

私は埋没林は、世界的な貴重な資料だと思いますし、四千年前の火山活動で三瓶の森の一部が化石になったことに大変感動しました。実際に木に触れてみて、縄文時代にワープしたような思いがしました。縄文人になり巨木に囲まれているような感じがしました。

大森　いも代官と呼ばれた

井戸平左衛門

井戸平左衛門は、大森代官所のお代官でした。なぜ代官所のお代官の井戸平左衛門がいも代官と呼ばれたのか調べました。

江戸時代、大飢きん（享保の大飢きん）が起こり、大森の領民も食べ物に困っていました。代官の平左衛門は、代官所の蔵にあった米を領民に分け与え、その年は年貢を取らないことにしました。また、平左衛門が薩摩から取り寄せた甘藷を、ある農民が育て地域に広げ領民たちを救うことになりました。それをきっかけに「いも代官」と呼ばれることになりました。

【編集後記】

大森町、温泉津町を訪問し、昭和の時代を感じさせるレトロな風景に温かみを感じ落ち着いた気持になりました一方、お店の中はきれいに改装され、都会の雰囲気に驚きました。

素晴らしい発見のあった二日間でした。